

# 総理の格付け④ 福田赳夫と経済の名医

政治アナリスト  
元杏林大学教授

豊島典雄

日本のGDPは1990年には世界のGDPの13・3%だったが、2019年には5・8%に落ち込んだ。国民1人あたりのGDPは、2000年には世界第2位だったが、2018年には26位にまで下がっている。世界の企業の時価総額ランキングで、1989年には日本企業は世界の上位50社のうち32社を占めていた。2018年には1社、トヨタ自動車（35位）だけである。2020年には米国のGAFFMA（グーグル、アップル、フェイスブック、アマゾン、マイクロソフト）5社の時価総額が、日本の東証1部上場企業2170社すべての時価総額の合計を上回った。

平成以降は、失われた30年である。経済の名医が欲しい場面である。

1973年の石油ショックによる物価暴騰時に、日本経済の大混乱を鎮めた経済の名医がいた。今回は経済の名医と言われた福田赳夫総理

（1976年12月23日～1978年12月1日）を取り上げてみる。

## 昭和元祿

福田は1905年に群馬県生まれ。旧制高崎中学を首席で卒業し、第一高等学校を経て、東京大学法学部卒。大蔵省にトップの成績で入省した。42歳の若さで主計局長にまで上り詰めた。しかし、1948年、贈収賄事件である昭和電工事件に巻き込まれ取賄容疑で逮捕された。結局、裁判で無罪となったが、エリート中のエリートである福田にとっては人生初の挫折であった。



福田赳夫

1952年に、故郷の群馬3区から無所属で総選挙に出馬し、当選した。

1953年に自由党に入党した。農水相、蔵相、外相、自民党幹事長、政調会長等の要職を歴任した。

福田は造語の天才である。昭和元祿は、1964年（昭和39年）の東京五輪の頃の軽薄な風潮とそれを生んだ池田勇人内閣の高度経済成長政策「所得倍増計画を批判した福田（当時は自民党政調会長）の歴史的名言である。また、「狂乱物価」「明治38歳」「人の命は地球より重い」「アヒルの水掻き」「昭和の黄門」等の名言を残している。

昭和の政界では、万年与党の自民党内で、政策を掲げた激しい権力闘争が展開された。

1964年、安定成長政策の福田は時の総理、池田の高度経済成長政策を「見せかけの繁栄は昭和元祿にすぎない」と批判し、骨っぽいところを見せた。

「池田内閣の所得倍増、高度成長政策の結果、社会の動きは物質至上主義が全面を覆い、レジャー、バカンス、その日暮らしの無責任、無気力が国民の間に充満し、元祿調の世相が日本を支配している。経済面では物価が高騰し、国際収支は未曾有の困難に追い込まれ、広い国民層に抜き難い格差感を植えつつある」と厳しく批判した。

福田は1970年代、1980年代には高等小学校卒で、今大閣の田中角栄との間で、竜虎相搏つような権力闘争を展開したが、この角福戦争では、福田は連戦連敗であった。

1972年（昭和47年）のポスト佐藤栄作の総裁選は「三角大福中」の争いだったが、実質は、田中と福田の角福戦争であった。福田は佐藤栄作総理による角福調整による禅譲を期待したが、田中は乗らず総裁選で田中に敗れた。

「決断と実行」を掲げた田中はコン



ダッカ日航機ハイジャック事件

ピューター付きブルドーザーとも言われたが、庶民宰相として国民の極めて高い支持を得た。

### 経済の名臣

しかし、1973年の石油ショックでは、田中総理の「日本列島改造論」の影響もあり地価の暴騰、それに引きずられて諸物価も高騰し、消費者物価指数は23%も上昇した。非常事態だ。

愛知揆一蔵相が急逝した。福田は「私は、直感的に『愛知君は病死ではない。悶死だ』と思った。大インフレ、国際収支の赤字のところへさらに10月からの第1次石油ショックが重なり、心労に耐えきれなかったのだろう」（福田 越夫著・回顧九十年）と見た。

田中は終生のライバル福田に「容易ならざる事態となった、力を貸して助けて欲しい」と蔵相への就任を要請し

た。英雄、英雄を知るの場面である。福田は田中に日本列島改造論を撤回させ、蔵相に就任した。

福田は「日本経済は全治3年、物価は狂乱状態」と診断し、新幹線や本四架橋、2兆円減税、予算編成などの経済政策すべてを見直し、総需要抑制策の強化に取り組んだ。見事にインフレを抑制し、ピンチヒッターの大役を果たした。こと経済に関しては福田の完勝だった。

福田はロッキード事件が発覚し、田中前総理が逮捕、起訴された1976年末に71歳で総理に就任した。明治38年生まれの福田は「私は明治38歳」と若々々を強調した。

### 人命は地球より重い？

1977年9月、ダッカ日航機ハイジャック事件が起きた。「人命優先」の立場から法を曲げてでも犯人（日本赤軍）たちの要求（服役中の赤軍兵士等の釈放、人質の身代金600万ドル、16億円）に屈するか、あるいは「法秩序維持」を盾に要求を拒否するかで、一時は政府内部で見解が鋭く対立した。福田一法相と園田直官房長官が声を荒げてやり合う一幕もあった。総理の福田は「犯人の要求を呑むしかない。

人の命は地球より重い」と決断し、超法規的措置で犯人側の要求を受け入れた。テロに悩まされている諸外国からは「日本はテロまで輸出するのかわか」と非難されたが、苦しい決断だった。

事件が一段落した後、福田法相は超法規的措置をとった責任を負って辞職した。

### 成田空港開港

福田内閣が発足した頃には、羽田空港の過密状態は極限を越えるところまで来ていた。成田空港の早期開港が望まれたが、左翼過激派の反対運動が激しかった。

福田内閣は「昭和53年3月30日開港、4月2日運航開始」と決めていたが、その直前の1978年3月26日に、マンホールを伝わって空港内に入り込んだ左翼過激派によって空港管制塔が占拠され、機器類が破壊されたのだ。

福田は「国際的に恥ずかしい限りだ」と思ったが、党内の一部には「無茶をする、安保の二の舞にならねない」「ここは開港を延ばし、1年くらい間を置いたらどうか」という意見もあった。しかし、福田は「間をおいてはいけない。そんな悠長なことを言っていない。

たら、これからすべてやられてしまう。政府の権威もなくなる」と考え、断固としてなるべく早く開港するよう指示した。内閣は4月3日に、「5月20日開港、21日運航開始」の方針を決定した。

党内にも「過激派對策には、現行法では限界がある。過激派の拠点となっている『団結小屋』撤去を主眼とする新規立法を直ちに行なうべきだ」という声が高まった。

こうした党内世論を背景に成田空港法が自民党、公明党、民社党、新自由クラブによる議員立法で成立し、予定通りに開港できた。福田内閣の大きな功績である。

福田は、日中平和友好条約の締結という業績も残した。しかし、1978年11月、自民党総裁予備選で大平正芳幹事長にまさかの敗北をした。福田の周辺にはあくまで国会議員による本選挙で巻き返そうという意見が多かったが、「私がかねてから予備選挙の結果を尊重すると言ってきた。まあ天の声もたまには変な声もあると思う。敗軍の将、兵を語らずだ」と退陣を表明した。さわやかな引退だった。